

Multigene Analysis Unveils Distinctive Expression Profiles of Helper T-cell-related Genes in the Intestinal Mucosa that Discriminate Between Ulcerative Colitis and Crohn's Disease

井星, 陽一郎

<https://hdl.handle.net/2324/1470530>

出版情報：九州大学，2014，博士（医学），課程博士
バージョン：
権利関係：やむを得ない事由により本文ファイル非公開（2）



(別紙様式2)

氏 名	井 星 陽 一 郎			
論 文 名	Multigene Analysis Unveils Distinctive Expression Profiles of Helper T-cell-related Genes in the Intestinal Mucosa that Discriminate Between Ulcerative Colitis and Crohn's Disease			
論文調査委員	主 査	九州大学	教授	吉 開 泰 信
	副 査	九州大学	教授	須 藤 信 行
	副 査	九州大学	教授	谷 憲 三 朗

論 文 審 査 の 結 果 の 要 旨

炎症性腸疾患（IBD）は主に腸管をおかす難病で潰瘍性大腸炎（UC）とクローン病（CD）からなる。これまでの研究により、IBDでは腸管における異常な免疫応答の関与が指摘されている。ヘルパーT細胞（Th）と制御性T細胞（Treg）等のCD4＋T細胞は獲得免疫の司令塔の役割を果たし、IBDにおいてはTh応答の制御異常がみられる。IBDの動物モデルや、IBD患者の腸管粘膜単核球のin vitroでの分析、などの特定の状況下ではUCとCDでは異なる特徴的なTh応答の亢進がみられるが、IBD患者の炎症部粘膜組織におけるTh関連の免疫学的分子の発現解析では両者で明瞭な差異は報告されていない。本研究ではTh、Treg関連のサイトカインと核内転写因子の発現について多変量解析を行うことにより、UCとCDを判別できる異なる発現パターンを同定することを示した。この手法は、Thに関連する重要な免疫学的分子の相互作用を反映しうるため病態の理解の一助となり、またIBDの臨床において両者の鑑別診断のマーカーとして応用できる可能性があると考えられた。

以上の成績はこの方面の研究に知見を加えた意義あるものと考えられる。本論についての試験はまず論文の研究目的、方法、実験成績などについて説明を求め、各調査員より専門的な観点から論文内容及びこれに関連した事項について種々質問を行ったがいずれについてもほぼ適切な解答を得た。

よって調査委員合議の結果、試験は合格とした。